

フィリピン・リトルタジャン

飼料用有機トウモロコシ 視察報告

Message

畜産部会の今年度のテーマは「世界に通用する有機畜産」。部会では大きな課題となる有機飼料について、国内自給の方向性と海外からの調達について調査しています。フィリピンの北ルソンの丘陵地帯で有機トウモロコシを栽培しているリトルタジャン地域の生産者を訪問しました。

Radix

■フェアトレードで 有機飼料を

今回の視察はRadixの会も会員として参加している日本オーガニック農産物協会 (NOAPA) と、そのメンバーであり、Radixの幹事でもある中村孝治さん (共栄ファーム・茨城県) のご協力により実現しました。

NOAPAでは有機畜産の課題となる飼料の有機での調達について、全国の生産者、飼料メーカーなどからなる協議会を設置し取り組みを実現してきた実績があります。ここで中心的な役割を担ってきたのが中村さんと、向山茂徳さん (黒富士農場・山梨県) の2人。

「大切なのは産地との関係作り。顔の見える関係を安定的に結べることがこれからの畜産には必要だ」。

牛・豚・鶏共に使用されているトウモロコシについて、2人はアメリカや中国など主要国を調査してきましたが、バナナなどでお付き合いのあるオルタートレードジャパン (ATJ) からの情報により、フィリピンでフェアトレードによる調達が可能性として浮上、以来4年間、2人は「有機」「フェアトレード」の2つのテーマを追いかけ続けています。

■幸せである

「最初はみんなから笑われたが、やりたい人が増えてきている。3年間歯を食いしばってがんばって、無農薬でもできるようになってきたので、借金漬けから抜け出された。今のところ僕は幸せだ」。

生産者とのミーティングの中で、現在の問題は何かとの質問に「除草がたいへん」と答えてくれたのが、中心メンバーのヤダンさん。これまで3.5haを5回作ってきました。ひと

口に3.5haと言っても、作業はカラバオ (水牛) のほか、ほとんどが人力。熱帯の酷暑のなかの除草の苦勞が偲ばれます。そのヤダンさんは真っ黒な笑顔と、ちょっぴりの心配顔で、次回の作付けからもう1haの作付け増を望んでいました。



夕食後、ランブの明かりを囲んで生産者とのミーティングを行なった。1カ月前の台風以来電気が来ていない。

■継続的な取り組みに

今回の視察メンバーは6人 (※)。3泊4日で現地の圃場視察、10名の生産者との会談、調整作業や倉庫の確認、マニラでの保管システムを確認するという強行スケジュールでした。

リトルタジャンはルソン島の北、東海岸から続く稲作地帯を過ぎて西部の山岳に進む途中の丘陵地にあり、172世帯の人々がつましく暮らす農村。ATJ代表の堀田さんによると、



この土地はかつて森林だったと聞いた。トウモロコシの小高い丘が続く単一相だから地力収奪の克服が大きな課題。



収穫された有機トウモロコシを掲げて微笑む現地 NGO・CORDEV (Center for Organic farming and integrated Rural DEvelopment) のリーダー、グレッグ・ラシガン牧師。プロジェクトのけん引役だ。

主な産業の飼料用トウモロコシは海外の商社などから委託を受ける慣行栽培で、経済的には苦しい状況にありました。中村さんたちが視察を行ない、最初の作付けを依頼した2000年5月は50ha中37haがもと慣行栽培の農地でのスタートでした。

年2回の収穫ができるこの地で、今回の視察は7回目の収穫後だったので、当初56人いた生産者が無農薬の難しさで離脱したり、せっかく無農薬で収穫したものが慣行のものと混ざってしまい出荷ができなかったりと、様々な壁にぶつかったとのこと。早ばつや台風の被害に遭いやすい土地柄、満足いく収量に至っておらず、もともと地力収奪型の作物なので、堆肥など有機肥料の確保も含めて技術的な課題も抱えています。

その一方、取り組みを現地で支えている NGO や ATJ などの協力、中村・向山両氏の継続的な購入により、わずか4年の取り組みの中で、根気強く栽培を続けている生産者の皆さんが経済的に安定してきていることや、市場からの相場買いではない、トレーサビリティとしての信頼性など、地元の方のお話しから窺うことができ、継続することの大切さを感じました。

(事務局・竹内)



圃場で。左から岸さん、川崎さん、中村さん、グレッグ牧師、ジュリオス (CORDEV)、向山さん、堀田さん、ジョイ (ATC)